村野次郎創刊

# 香蘭

2023年（令和５年）８月号

第 100 巻　　第 8 号　　通巻 1112 号

二〇二三年（令和五年）八月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第一〇〇巻第八号

# 香　　蘭

2023年（令和５年）８月号
第100巻　第８号　通巻1112号

## 目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（96）……庄司　健造……表二
近詠十五首　五色の春……河野　慎二……2
作　品
一……4
二……22
三……28
推薦香蘭集……36
香　蘭　集……37
作品一　十首選（六月号）丸山三枝子選……16
作品二・三　十首選（六月号）渡辺礼比子選……18
一頁公論（27）あれから三年　コロナの日々は……満木　好美……15
村野次郎への旅（160）……千々和　久幸……20
羊屋の回覧板（2）極秘の履歴書……河野　慎二……27
エッセイ・自由研究　短歌に見る身近な木々……伊藤　美恵子……40
焦　点（六月号）表現に工夫のある歌……石井　雅子……42
七　首　抄（六月号）……市川・加瀬・馬場・奥田（富）……44
中井房江「遠からず」評（六月号近詠十五首）……牧野　道子……45
作　品　評（六月号）　作品一……千々和　久幸……46
作品二……田中　あさひ……48
作品三……丑山　眞弓……50
香蘭集……川久保　百子……52
緑　地　帯……中井・吉澤……54
耳言あれこれ（21）……田中　あさひ……57
明宝研究会第一四〇回　五月例会　与謝野鉄幹の葉書を中心に
～覚え書きとして～……髙畠　憲子……58
他誌拝見128……八木橋　洋子……66
歌会及び会合・会員消息・他……68
編集後記・新宿日記……72・表三
表紙絵……中村　陽子「春ひかる」　目次・緑地帯カット……和田　和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（96）

たまさかに吸ひたる煙草あなうまと
こころしびれて眼はつむりたる

『続樗風集』

庄司健造

1940（昭和15）年、先生46歳の時の作品で、『続樗風集』の小題「続禁煙賦」の連作七首中、二首目に置かれています。

この一連には、〈知らぬ間にこころのすみより襲い来て断ちきり難きものと戦ふ〉の歌もあります。

私も煙草を吸うので、この歌が目に止まりました。久し振りに吸った煙草が、ああ、おいしい、と感動のあまり眼をつむってしまった、という歌と思います。先生は相当なヘビースモーカーでいらしたようですが、何らかの決意で禁煙されたのでしょう。

完璧な禁煙までの数日間か数週間の心の葛藤が窺われます。その葛藤から解き放たれた時の感動が、下句の〈こころしびれて眼はつむりたる〉のストレートな表現から見えてきて、私の心に響いてくる思いがします。

健康のこと、副流煙のことなどが問題視されている昨今、私は禁煙に踏み切れない弱さを感じています。

（『続樗風集』150頁、『村野次郎三百首』48頁に掲載）

# 四選者の作品

## 少し過剰

平塚　千々和　久幸

寧日といえる日少なほどほどに生きて伶人草を愛せり
未だ見ぬ海の向こうに手を振ってさよならを言う別れたくはなし
金曜日に海軍カレー食いしかば翌日もまた金曜日なり
櫂と書き龍と続けてわれの名は針であったかあるいは栗鼠か
落椿靴底に踏み斬りに行く敵など今宵のわれにはあらず
杉浦さんあなた少し過剰じゃないあたしは殆ど浮いていますが
関係者前への声に出席の大方がぞろり立ちあがりたる
リハビリのため亡き妻が使いたるボールを壁に放りて遊ぶ

## ハコネウツギ

東京　桜井京子

パソコンも人も壊れるこれの世のわがパソコンは修理を終へつ
庭隅に咲きたる朝のハコネウツギいいことだつて時々はある
私この頃あぶないのよね　さうなのかあなたも私も仙道だから
言ひたい放題言ひて行きたる人の香が薄荷だつたか今でも苦手
心無いひと言だけどまあいいかナガミヒナゲシは咲いてるだけだ
だんだんと小さくなつてゆくらしいY染色体に栄光あれよ
リフォームがちやうど終はつた頃なりきあれから三年コロナの日々は
重き荷を担ぎ続けたわけもなく六十代後半の肩の痛みは

## 小網代の森

横浜　渡辺礼比子

サボテンの白き花咲く　切なさと睡魔の交互に襲う真昼間
無人野菜販売所にて買うキャベツ百円入れんとして緊張す
地域猫保護ボランティアと住民の論かみ合わず　伸びをする猫
いまのままのあなたでいいといわれいて庭の鈴蘭かすかに鳴れり
美しき姉妹住むごと古家にクジャクシャボテン二輪のひらく
つぎつぎに花散らせたる晩春の森はけだるき甘さに充てり
遥か先を歩める夫は忘れいんかの春の夜のプロポーズの言葉
干潟なる無数の穴に稚児蟹がラジオ体操しているところ

## 卯月吟行

鎌倉　髙畠憲子

ハンチングに四月の雨を弾きつつ原さんが下見せし三渓園
ジーンズにリュックの歌会司会者と三渓園行バスを待ちをり
汁無しの蕎麦考案す三渓は客人の着物よごさぬやうに
そのかみの句会・歌会の開かれし待春軒に蕎麦すすりをり
品書きが短冊のやうに見えてくる即詠の旅に寄れる茶店に
名物の三渓蕎麦をすすり終へやをら取り出すおのおのペンを
吟行は初参加なる泰子さんが一心に詠む園の花嫁
池の辺のベンチに電子辞書を引く吟行の友に声掛けはせず

# 作品一　十首選

（六月号作品から）

丸山　三枝子　選

**・平和令和令和平和と唱えつつ鶏（にわとり）の羽毟っています**

**千々和久幸**

四年前の二〇一九年五月一日に元号が平成から令和に変わった。この改元後に世界はコロナ禍に見舞われ、ロシア・ウクライナ戦が勃発し、どちらも終息を見ない。一方国内では、人間の命が軽く扱われる事件が尽きることがない。上句の繰返しのフレーズからは、そんな現状への呪詛のような声が聞こえる。下句の目を背けたくなるような動作が、上句の呪詛のようなフレーズと響き合ってくる。結句の「毟っています」の口語口調からは千々和節とも言える辛辣なウィットが感じられる。

**・やうやうに今年も来たかジョウビタキ暫し見てをれわが畑打つを**

**青山　侑市**

広辞苑で繰ると「ジョウビタキ」は冬鳥、人を恐れないので〈バカビタキ〉とも呼ばれるらしい。漢字だと〈尉鶲〉で、威厳のある老翁の風情ながら、何とも憎めない鳥らしい。春になり畑打ちの作業を始めた作者は、「ジョウビタキ」が来るのを待ち侘びていたようだ。上句のジョウビタキへの呼びかけも、下句の「暫し見てをれ」の親しげな命令口調からもそんな思いが偲ばれる。厳しい農作業も愉しんで熟す作者。この呼びかけの表現に臨場感が籠もっている。

**・うぐいすの歌が上手になりました詣でし寺の若方丈が言う**

**朝香ふさ枝**

今号は時節柄、「鶯」の鳴き声を詠んだ歌が多かったが、この視点が面白い。観光か馴染みの寺での属目だろう。ここでは「うぐいす」の鳴き声そのものではなく、「寺の若方丈」とのゆかしい会話の一齣がさらりと掬われ、それがとてもいいのだ。こんな一齣の前後に、作者も「上手になった」「うぐいすの歌」を聴いていたことだろう。端正なうぐいすの歌と、ある日ある時の二人のゆかしい映像の余韻が読後に広がる。「方丈」は寺院の長老、住職のこと。

**・ピアノの後ろに落ちた油絵これも手の届かぬところにゆきてしまえり**

**伊藤美恵子**

「ピアノ」は壁に向かって置かれているのだろう。初句に「ピアノ」が、次に「油絵」が出てきて、どんな展開になるのだろうとワクワクして読み下すと、喪失感ただよう哀切な感慨に行き着く。三句～四句への句跨がりの不安定感に心の不安感が重なってくる。「手の届かぬところに」行って了ったことのどうしようもなさ。三句以下の表現で、「油絵」などの物だけではない、もっと広範囲の事柄も含んでいるのだろうと思われる。物に限らず生物の命も、いつか手の届かぬところに行って了うのだろう、との必然が思われる。

**・「もうちょんぼし日本語で話してごさんかの」テレビ画面に向かひて夫は**

**岩田　明美**

嘗て竹山広は〈キャッシング或いはローンクレジット借金も今は

ハイカラに言ふ〉と皮肉った。今のコロナ禍騒ぎで次々に片仮名言葉が生まれ辟易するが、ここでの「夫」の呟きは、作者のお国訛りであろう。夫の呟きをそのまま上句に配して、現代への批判が込められている。メディアへの批判とも若者言葉への批判ともとれそうだが、ここではそれを問う必要はない。歌詠みの作者ならではの言葉への拘りに他ならないから。

**・さくら花ひとつ咲き初め学校の鳥小屋に春の日差しがそそぐ**

**江口　絹代**

〈鳥小屋〉のタイトルでの連作の掉尾に置かれている歌。こんなシンプルな叙景がいいなぁと思う。一輪の花を付けた桜木の下に低くちんまりとある「鳥小屋」。この鳥小屋には何と孔雀が飼われているのだが、この何でもない学校の鳥小屋がいいのだと思う。中に何が飼われていてもいい、読者の想像が膨らむから。冬の肌寒い季節からそこにあった鳥小屋に今、「春の日差しがそそ」いでいる。それだけでいいのだ。連作の構成にも神経が行き届いている。

**・ひとたびは空へ向かひて舞ひあがれ島山の桜海へ吹かるる**

**岡野　甫江**

この前の歌は〈高き辺に母来給ふか満開の桜仰ぎて忌日迎へる〉で、満開の桜。咲ききった満開の桜は散るべくなって散る訳だが、この桜は海際に立っているのだろう。海辺の桜は海へ向かって散る。海風に吹かれて「ひとたびは」空へ空へと舞い上がる花びらの美しい光景が浮かぶ。その花びらに「舞ひ上がれ」と呼びかける。桜を見ると心が弾むのだろう。さらに、この光景と散りゆく桜を惜しむ心が窺える。終いには風に吹かれて海の藻屑と消えるのだから舞ひあがれ花片よ、と。

**・鼻風邪に目眩と耳鳴り増えたれば病名もらいに病院へ行く**

**沙　阿　羅**

「鼻風邪」はいずれ治るだろうが、「目眩と耳鳴り」は厄介だ。眼目は下句の「病名もらいに病院へ行く」である。私たちは何故か病名をもらうと心が落ち着く。病名が分かるとそれを治す薬も出るからかも知れないが、それだけではなく私たちは、自分を納得させるためにはそれなりの理屈が必要なのだろう。感情では納得するがまだもやもやが残る。病名をもらうと何故か安心できるそんな存在だったんだな、と思う。人間とはそんな不自由な存在なのだ。

**・この痛み取れるものならなりまする統一教会の信者にだつて**

**西野美智代**

時事批判の歌は作者のモチーフの一つだが、ここでは三句の「なりまする」のシニカルな言葉に注目した。持病の尋常ではない痛みを逆手に取って仕上げたシニカルなこの歌からは、それほどに統一教会批判への思いの深さが窺える。この痛烈な批判精神は、作者の弱者への包容力の裏返しとも思われる。教師時代の、悩みを抱えた教え子や劣等生の教え子を今でも温かく力づけ、見守る作者だ。

**・前ばかり見て待っていた幸福が斜め後ろから来ることもある**

**渡辺礼比子**

「幸福」が後ろから来ることはあるだろうか。一読、死角とも言える位置から詠まれたこの歌に立ち止まった。「幸福」という概念に冠せられるイメージは、未来からのものとの先入観がある。「斜め後ろから来る」とは、つまり過去の側からも「幸福」が来ると言うことと読んでみた。蘇った過去からの幸福な思い。ここでは通常の先入観を、繊細な感覚で詩的にデフォルメして一首にしている。

# 作品二、三　十首選

（六月号作品から）　渡辺　礼比子　選

**・渦まきて湯船のお湯が流れ去り失敗ばかりのひと日が終わる**

中村　陽子

家族の最後に入浴し、風呂掃除を終えて、一日が終わる。最後の湯が渦を巻きながら、排水口に吸いこまれてゆくのを見ながら、作者は今解放感と安堵感に浸っている。この一首は、いわば時間の節目を視覚化した歌とでもいおうか。さすが画家の「目」を持つ人の作品と思った。ただひとつ注文をつけるとすれば、二句目の「お湯」はいかがなものか。「湯船より湯の流れ去り」とでもして「お」は省きたいところだ。

**・ボランティアの会解散し部屋を去るカチャリと鍵の小さき音させ**

平川　良枝

いかなる活動をしていたのか、ここでは触れられていないが、この部屋は奉仕団体の拠点としてあったのだろう。志をたてて活動を始めたが、何らかの理由で終わらせなければならない時を迎えた。「カチャリ」というカギの音には、これまでの充足感も、あるいは小さな悔いも込められていたかもしれない。活動の終わりは作者の生活の節目でもあったはずだ。よけいな説明を省いて、鍵の音ひとつにすべてを語らせたことで、歌に奥行きが生まれた。

**・流石ですなどとほめつつ要望を伝えて長い電話を終える**

松沢みどり

「流石です」は誉め言葉としてある意味まことに使い勝手がいい。へつらうという程でもなく、そこそこ相手をいい気分にさせる便利な表現である。作者としては本意ではないが、仕事をしていれば、ときには、心にもないことを言わなければならないこともある。とにかくこちらとしては要望を伝えるのが目的だから、根気よく電話につきあったのだ。そこが職業人のつらいところなのだろう。

**・何となく一日一日をこなしゆくその殆どが食のことなり**

三浦　伶子

他にデイサービスの歌があるので、御年を召された作者なのだろうと想像される。年をとってくれば、動作もゆっくりになり、できることも限られてくるのは誰しも同じであろう。人により一日の仕事量はそれぞれ異なるが、作者はどうかといえば、今となっては自身の健康を保つためにしっかり食べることだけで精一杯である。食こそ生きることの基本であり、それで十分ではないかと思うが、作者にとっては、寂しさが拭えない。

**・自給自足できない国の傲慢を画面に見せる料理番組**

三神　進

テレビではクッキング、食べ歩き、果ては大食い選手権など、飽食の時代を象徴する番組が日々放映され、目に余るばかりである。私たちは食物の豊かな国に生きていると錯覚しがちだが、食料自給率は低く、必要な食糧の多くを輸入に頼っているのが現実である。しかもとりわけ便利な都会に住む人間はそのことをほとんど忘れて

生活していることこそ問題なのだろう。この一首では「傲慢」の一言で結論を出してしまった感があるが、上句を「自給自足できない国の飽食を」とでもすれば、さらに奥行きが生まれるのではないだろうか。時事に鋭敏な作品として注目した。

**・淡々と黙々と皆引き受けて「あなたは不幸な人」と言われる**

**柳沼きよ子**

いかなる人間関係なのかは書かれていないが、作者はこれまで、地味な仕事を黙って淡々とこなしてきた。それは実に尊いことであり、自身もそういう立場に誇りを持ち、不満など感じたことはなかった。共同体は往々にして、そういう縁の下の力持ちによって支えられているものだ。それをある日第三者から「あなたは不幸な人」だといわれてしまった。これでは作者としては、立つ瀬がない。せめて歌にすることで恨みを晴らして欲しい。

**・最強の寒波の予報は雪となりミサイルも降る暗き大空**

**川久保百子**

最近の天気予報では「これまでに経験したことのない」とか、「最強の」などという過剰な形容が日常的に使われ、かえって視聴者を混乱させている。しかしこの歌の場合、作者のいいたいことは下句にある。雨や雪と同じようにミサイルが降るようになったらたまったものではない。歌作りのテクニックとして、何の変哲もない日常の中にミサイルを詠み込んだ作者の意欲を買いたい。それにしても、政治は混乱するばかりで本当に大事なことが議論されていない。しっかりと備えをしておかないと、この国はいつの間にか大きな力に巻きこまれてしまうだろう。

**・餌を持つ我に集まるカモメたち何度会っても名も知らぬまま**

**小城　勝相**

作者は餌に群れてきては、再び海上に散っていくカモメらの姿をただ黙って見送っている。彼らとは、その時かぎりの邂逅であり、名乗りあうこともない。ましてやよけいな気遣いをする必要もない。この距離感が実に心地よい。憂き世のしがらみにうんざりしている、作者の素顔もうかがえる一首。

**・近隣に新築なるかクレーンの鉤が桜花の上を行き来す**

**澤田久美子**

クレーンの動きを窓から見ている作者。「鉤」が動くたびに、今まさに盛りを迎えた桜に触れてしまうのではないか、花を散らしてしまうのではないかと、はらはらしながら見守っている。一首としては、クレーンと桜の意外な取り合わせに感心した。作者はリアリズムで詠んでいるつもりかもしれないが、事実が詩になっている点が見どころといえよう。

**・曽良の像の右手不安気に伸びゆきてその先に立つ芭蕉の像は**

**田村　久美**

芭蕉と曽良の像は全国にあるが、同じ号に百代橋の歌も載っているところを見ると、この歌の題材は、奥の細道の旅の二番目の通過点、草加に取材したものと思われる。この芭蕉師弟の像を見て作者は様々に想像力を膨らませている。なかでも「右手不安気に伸びゆきて」という見たてが秀逸である。これからはじまる師芭蕉との長い旅において、いわばプロデューサーとして、無事に役目を果たさねばならぬという、曽良の心意気と不安が凝縮された右手である。

# 五色の春

河野　慎二

霜光る朝(あした)まぶしき地に膝を折りてレンガを積む庭仕事
冬晴れの空と向き合ふわれはいまなんじやもんじやの木の上ですよ
お抱への庭師となりて天地(あめつち)のはざまの枝をうつ松林
松手入れ終えたるのちに帰りゆく夕べ脚立を横抱きにして
庭先にかくも匂へる鶏糞に五色の春を夢見るわれは
単調なリズム重ねて板塀を貼らんと釘をしたたかに打つ
読む詠ふ時間(とき)を奪いぬなけなしの小遣欲しさの筈の仕事が
新しき我をわが手にせし春よ日本野鳥の会会員
スコープの輪が捕らえたる渡良瀬の三十倍率のコウノトリ
花曇顎を突き出し目の前の藪に消えたる雉を見たかい
目をともに細めて聞きをり野茨の藪の中なる雉の足音

## 近詠十五首

鳥籠のうちなる小鳥の落書きもありし二十歳の春の日記に

店員の甘い言葉に波斯（ぺるしあ）の仔猫を乗せたる春のてのひら

かたはらに猫が寝てをり猫といふその音（ね）のさまにかくやはらかに

死の床も微笑を浮かべるわれならん猫の寄り添ふこの歳月に

## ひと言随想

### なんじゃもんじゃの木

話はやや古くなるが昨年末のこと。「なんじゃもんじゃの木を剪定して欲しい」という依頼があり、実物を見る前から楽しみにしていた。例の方代さんの一首もあり、たとえばディズニー映画に出てくる魔女の木のイメージ、うねうねとした枝ぶりの禍々しい姿を思い描いていたのだが、特定の樹木をさす言葉とは違うらしい。私が出会ったのは「一つ葉田子」というトネリコの一種で、初夏になると雪のように白い花を付けるのだという。なにぶん落葉期だったので、花どころか枯葉一枚付いていなかったが。

近詠といいながら、右は半年程かけて作ったものである。一部は一年近く前に作った歌さえある。出来るものなら庭仕事から発想し得た十五首を並べたかったが、それも果たせなかった。数が作れない、というのは、歌を始めて以来の課題であり続けている。

村野次郎への旅（160）

# 大正期の「香蘭」（二十一）

千々和　久幸

「香蘭」第四巻第十號は大正十五（1926）年十月一日に發行された。東京市外淀橋九二　編輯兼發行者田中次郎は変わらない。表紙畫及題字、裏畫は引き続き北原白秋。誌面は五十六頁、定價一部金四拾錢、郵税貳錢であった。ついでに記せば奥付にこうある。広告料一頁金二十圓、半頁金十圓、大賣捌所東海堂、大東舘、北隆舘、東京堂。

マイナーな歌誌とは違い体裁は一般誌並である。往時の「香蘭」の力が知れよう。白秋の表紙畫は簡単な花のスケッチ、裏畫には小鳥があしらわれている。畫からは花の名前、鳥の名前は読み取れない。

白秋年譜の大正一五年にはこうある。四一歳、小田原生活を切り上げて上京、下谷区谷中天王寺町（現・台東区）に転居。一一月、詩誌「風景」を創刊。この年、詩文集『風景は動く』、童謡集『象の子』刊行。（高野公彦編『北原白秋歌集』）

詩に童謡に白秋の多忙さが窺えるが、この時期は歌人白秋の顔は見えない。

さて「香蘭」十月号の目次は、巻頭の同人の短歌欄に村野次郎以下十五名が出詠、酒井廣治、深野庫之介、清原齊、本間樂寛、冬野木枯、南部松若丸、川村浩、東朱雀、南草萌、鈴木幸哉、島田旭彦、石野正太郎、橋本政一、今井嘉雄、杉浦翠子がそうである。

次いで橋本政一のエッセイ「橘井堂雜筆」を挟んで、準同人の短歌欄に以下の九名が出詠、芥子澤新之助、成田憲三、横山信吾、眞島勝郎、日根まもる、西村孝、若林昇、久米蒼月、住吉良康。

南部松若丸のエッセイ「鏡葉より觀たる窪田氏の心境」、神無月集（短歌）に打田雅之、佐藤達夫ほか十名が出詠。香蘭合評會、「前月歌壇合評（杉浦翠子、村野次郎、橋本政一、酒井廣治）、光芒集（短歌）に谷川英一ほか十六名が出詠。

本間樂寛のエッセイ「烟れる田園」を讀んで、さらに白露集（短歌）に三十一名が出詠。その他、歌會記事、六號雜記、校正便、編輯後記という構成である。

村野次郎「あけくれ」から見ていこう。

あけくれ　　村野　次郎

①法師蟬なく日となりてあわただし氣になる仕事今日もはたさず

②われとても或はこころたぎちなばつきつめて人に迫りたるべし（或る時）

③街の陽の照りかへし暑しいづこにかむごたらしく犬のぶたれ居るこゑ

④こころにしみて居るにしあらん石竹のくれなゐばかり眼底（まなそこ）に見ゆ

⑤千葉の海に三日遊びて歸り來し樂寛の顔の皮のむけたり

⑥慕ふべきもののむなしさ鶏頭の花さへすでにうらがれにけり

「あけくれ」一連は文字通り身辺雜詠という趣で詠まれている。

⑤の歌は仲間の樂寛氏を茶化した剽げ歌で、先生には珍しく最初に目についた。海で三日も遊んで來るとほれこの通りと、海に行くゆとりのなかった先生も愉しそうである。

もっと言えば、作品の背後にきみはいい夏休みが出来てよかったよ、という先生の温顔が覗き、包容力の広さを窺わせる。

さて①の歌、誰しも経験のあることで共感させられる。わたしは小、中学生の頃、法師蟬が鳴き出してから夏休みの宿題を始めると両親によく笑われたものである。

壮年真っ盛りの先生にも、休むゆとりのなかった懸案事項が折からの法師蟬の急かせるような鳴き声で気になり始めたのだ。法師蟬の鳴き声には、その性急さと共に夏の終わりを思わせる哀感がある。

②の歌、①の歌とセットで詠めば、先生が先延ばしにされた仕事は、その気になって腰を上げるにはそれ相応の精神的なエネルギーが要る、と読める。それゆえ切羽詰まって「こころ滾る」まで待たねばならなかったのだ。

その引き金になったのが法師蟬の鳴き声で、いわば仕事へのウオームアップ（自己励起）の歌。「われとても」は「わたしだってその気になればやって退ける自信はあるのだ」、という自負が言わせたもの。「べし」はここでは「意志」と読んでおきたい。

③の歌、残暑の街のむごたらしい出来事を耳にしてのもの。この暑さに誰もが辟易し、つい感情を露わにしたくなる雰囲気に包まれている街。犬がどんな悪さをしたのか解らないが、幾度もぶたれて悲鳴を上げている声が耳について離れなかったのだ。

「むごたらしくぶたれ」は目撃した訳ではない、作者の想像である。だから読者には事実と感情の間に少し距離があるが、納得出来ない訳ではない。

④の歌、先生には珍しく初句が破調になっている。よほど「石竹のくれない」が印象深かったのだろう。石竹がそれほどまでに「こころにしみて居る」からだろうと、言う。

花の図鑑に石竹は「わが国では観賞用に庭園や鉢に植えられるほか、切り花としても愛されている」とあるが、写真で見る限り眠っているような淡い紅の花である。花の方から見る者の心に飛び込んでくる強烈さはない。

「らん」を推量と読めば、どこか他人行儀である。「こころにしみて居る」としながら、こころと石竹には距離がある。つまり石竹を目前にしながら、どこか心は退いている。

あるいは眼底に見えるのは（今のこころは石竹に向いていないのに）それはきっとここころにしみているからだ、と自分に言い聞かせているものか。いずれにしろ自分を客観化し、そこから見えてくるものを抉ろうとした、ユニークな視点を持つ歌である。

⑥の歌、リアリズムというより心理詠であり、箴言的世界が歌われている。一首の歌意は憧れて慕おうとする感情は一時的なもので、やがては消失することを思えば虚しいものだ。あの強烈な色彩を持つ鶏頭の花でさえいずれ枯れてしまうのだから、というほどのもの。背景になにか具体的な事実があったものか、たまたま目にした鶏頭の花からの連想か、その両者が綯い交ぜになった思いかは解らない。

箴言は普遍的真理を述べたものだから、観念的な言葉に凝縮されているのが常だ。それをこの歌が絵解きをしてくれたという匂いが消えない。わたし流儀に言えばハートよりヘッドに残響する歌である。そこにこの歌の面白味と臭味（教訓的）がある。書きながら楽しまざる批評になってしまった。